

▼研究旅行▲

雨の石山寺

二年 志村 小夜子

京都、奈良は今回の旅行で三回目である。一回目は高校二年の時行った修学旅行であり、二回目は今年の三月、クラブの友人四人と初春の京都を訪れ、そして今回の旅行となった訳である。

二度も行ったことのある京都へ再び訪れてみようと思つたのは、ひとつには大学へ入ったら文学に関する所へ研修に行くだろうと思つていたのに、過去にこのような機会がなかった事と、もうひとつには国文科の二年生と言つても知らない人が多いので、今回のような機会に多くの友達と接したいと思つたからである。

三日間の研究旅行で第一日目は石清水八幡宮、第二日目は山科方面、そして第三日目は石山寺、三井寺方面を選択して行って来たのだが、それぞれ印象深かつた。その中でも特に良かったのが最後の日に行った石山寺方面である。

この日は朝からすごく雨が降っていたが、私達六人は学部的一年生と合流する為に九時近く旅館を出発し

た。石山寺駅に着いた時も雨は夕立の如く降っていた。その中を瀬田川を横に見ながら、十五分ぐらい歩いて行くと石山寺であつたが、行く途中で靴も洋服もぐっしり濡れてしまい、肌寒くさえ感じられた。

石山寺はその名のとおり硅灰岩でおおわれていた。又、うっそうと茂つた大木とその岩とが雨に濡れて、木々の緑は一段と青さを増し、岩はその地肌である白と黒がなめらかで、キラキラ光っていたのが印象的であつた。そんな間に細く続く石畳を通過して石段を登ると、本当に硅灰岩が調和よく山を形作り、その岩と岩との間を雨水が勢いよく流れていた。忘れてしまつたが、本堂は三十何年かに一度しか見ることのできない秘仏、御本尊が安置されているとか。昔、紫式部が一週間ばかりこもつて源氏物語を書いたという源氏の間や、紫式部自筆の書、硯などを見学したのだが、平安時代、紫式部がこの部屋に座っていたのだといくら考えても少しも実感がわいてこない自分であつた。本堂を出て国宝である多宝塔へ行く階段は、雨水がごうごうと流れていた。従つて、晴れた日には見晴台から見渡せるという琵琶湖や比叡山の風景はあいにく見る事ができず、非常に残念であつた。

石山寺から瀬田の唐橋まで行き、食事を終える頃には朝からの雨はあがっていた。それから芭蕉の幻住庵へ向った。幻住庵は石の鳥居を通過して山の中腹にあり、一人暮しをするにはとても耐えられないと思うほど、寂しい所であった。芭蕉は一人ここでいったい何を思いついて暮らしていたのだろうか、などと感傷的にならずにはいられたかった。又、ここには庵があったことを示す「まづたのむ椎の木もあり夏木立」という句碑が建てられてあった。そこで私達は学部の人達が少々強行軍であったのと、加えて大ぜいの人達と行動することに少し疲れを感じていたので、先生に頼んで別行動を取ることにした。よって建部大社や義仲寺へは行かず、直接三井寺へと向った。

三井寺の門前にある一軒の民芸品店に入ったが、そこは本当に小さく、可愛い店でも素朴な感じがした。又、その店には大津絵が多くおかれていた。大津絵は世俗の風刺絵だそうで、一枚、一枚の意味を説明していただいた時にはとても興味深かった。三井寺はとても広く、その中にはいくつものお寺があったが、歌に多く読まれているという弁慶鐘や天智、弘文、天武天皇が産湯をつかったという霊泉の井戸などが印象

的であった。又、私達はゆっくり琵琶湖の上に浮ぶ白いヨットをながめたり時間をかけて境内を歩くことができた。

最後に、今回の研究旅行で良かったと思う点は、まずコースを選択して小人数で行動したことである。そして急いであちこち見て歩くのではなく、ゆっくりその場所を見学できたことである。夜の外出にしろ、あの面で自由だったと思う。それだけに自分の行動には責任をもたなくてはならないと思った。従ってただ見て回るだけの旅と違って、その場所に関係のある文学を通してその場所により一層の親しみを感じることができたし、後で本を読んだ時もおもしろくその本が読めると思う。高校時代、藤村の文学作品に関する場所である小諸や木曾路へ行ったが、それからは藤村の作品を読むたびごとに小諸や木曾路を思い出したように、源氏物語を読むたびごとにあの雨の日の石山寺を、「源氏の間」を思い出すことと思う。